

1.4 手書き文字による筆記：盲人用手書き補助具

盲人にとって最も適した文字は、点字であると述べた。点字板で点字を書くことも手書きであるから、盲人にとっての手書き文字とは、点字板で1文字ずつ書いた点字のことになる。したがって、盲人用の手書き補助具は、点字板ということになる。ただし、この節では、晴眼者の使う文字：墨字を手書きする場合のことを取り上げる。

上述したように、現代においては、手書き文字による筆記の意味は相当に薄れている。ただし、限られた場面では現在でも手書き文字が必要とされている。たとえば、肉筆を用いることによる本人の確認である。印鑑のかわりにサインを確認手段に使用する欧米では、視覚障害者も自分自身でサインをすることを期待されているし、晴眼者には真似できない特徴のあるサインをすることができる。その場合、サインする場所を外さないようにするために、サインの場所だけが窓になっているガイドが用いられ、銀行のチェックや契約書などの用途によっていくつかのバリエーションが用意されている。

サイン以外には、視覚障害者が「書」などのアーティスティックな表現を楽しむ場合や、中途失明者がプリンタの没個性的な出力では物足りなくて、運動感覚的に記憶している書字の能力を発揮して、晴眼者のためにメッセージを書くときなどに、手書き筆記が行われる。

墨字の手書きを補助するものとしては、特殊な紙をシリコンゴム・シートの上に乗せてボールペンで強く書くと、書いた線が浮き出してきて触覚で分かるようにしたレーズライタ (Raised Line Drawing Kit) がある。これは、晴眼の子供たちの学校に統合されて教育を受けている盲児たちが、教科書の図形を触って分かるようにボランティアに作り替えてもらう際などに良く用いられている。また、晴眼の先生に分かるように文字や図形を書いて答える必要のある場合にも用いられている。しかし、盲人自身が表現の手段として用いる例は多くない。

また、視覚障害者が本当の墨と筆で書を楽しむ場合に、それがどのような結果になったかをフィードバックするためには、立体コピーが用いられる。立体コピーは、発泡性のある特殊な用紙に原図をコピーして黒い部分が立体化するようにしたもので、レーズライタと同じく教材の作成に良く用いられている。しかし、中途失明者でもともと書字のできる人たちが上述したような方法で用いる他には、盲人が自分から表現の手段として、墨字や絵画などを手書きするために用いられることは余り多くない。

この報告書では、盲人の手書き墨字の筆跡を音に変換してリアルタイムでフィードバックすることにより、墨字の手書きを補助する機器を調査研究した。これについては、2章以降で詳述する。